Nagai, Makoto
Kokugogaku Bongo to kokugo

長井 真琴

国語学

梵語と国語

PL 664 S3N32

Nagai, Makoto
Kokugogaku Bongo to kokugo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

國語科學講座

—Ⅲ—

國語學

梵語と國語

長井眞琴

株式會社

明治書院

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/kokugogakubongot00naga

國語科學講座

— IV —

國語學

梵語と國語

長井眞琴

株式會社

明治書院

PL
664
S3N32

目次

緒言……（三）
一　漢譯佛典中の音譯語……（四）
二　我國に於ける佛典研究……（四）
三　我國の悉曇に就いて……（五）
四　俗語化した梵語……（六）
五　國語中の梵語……（六）
ア……（七）　イ・キ……（一〇）　ウ……（一一）
エ……（一二）　オ……（一三）　カ・ガ……（一四）
キ・ギ……（一七）　ク・グ……（一九）　ケ・ゲ……（二一）
コ・ゴ……（二二）　サ……（二三）　シ……（二三）
セ・ゼ……（二五）　ソ……（二五）　シャ……（二六）
シュ……（三〇）　タ・ダ……（三二）　ツ・ヅ……（三五）
ト・ド……（三五）　ナ……（三六）　ニ……（三七）
ハ・バ……（三八）　ヒ・ビ……（四三）　フ・プ……（四五）
ヘ……（四六）　ホ・ボ……（四六）　マ……（四七）
ユ……（五〇）　ラ……（五一）　リ……（五二）
ル……（五二）　ワ……（五二）
結語……（五三）

LIBRARY
AUG 17 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

梵語と國語

長井眞琴

緒言

本講座に於て、余は「梵語と國語」といふ題目の下に筆を執るべく勸められたのであるが、國語中の梵語に就いては古くから論ぜられて居り、又近世我が國に梵語研究が盛んになつて、故南條先生や高楠先生の先覺者を始め、諸學者に依て殆んど究め盡されて了つて、余の如き國語の研究者でもなく又梵語を專門とする者でも無い輩が、かゝる問題に就いて新しく筆を執るまでも無いことと思ふが、今日までの異說に就いて愚見を述べることも全く無駄ごとでも無いと信じて引受けたやうな次第である。

「梵語と國語」といふよりも「古代印度語と國語」といつた方が正しいと思ふ。それは梵語といへばサンスクリット(雅語)に限られるが、國語となつてゐるものの中にはプラークリット(俗語)とかパーリ(巴利)語といはれるものに近いものも稀に見出されるからである。されば玆に梵語といふのは廣く古代印度語の意味であることをお斷りする。

一　漢譯佛典中の音譯語

支那に於ける印度佛典の飜譯事業は後漢の明帝永平十年(西紀六十七年)に佛教が傳へられてから約一千三百有餘年間に亘つて行はれ、或は五千五百有餘卷といひ或は七千有餘卷といふほど佛典が漢譯されたのであつた。これ等の原典の多くは梵語若しくは不純梵語のものもあつたであらうが、又胡本とて中央亞細亞の某民族の言語で譯されたものもあつたであらう。これ等の原典を漢譯する場合に音譯といつて原語の音をその儘寫すにとどめたものも可なり多かつた。かの玄奘三藏は五種不飜を說いてゐる。卽ち一に秘密の義ある、二に多義を含み、三に支那に無いもの、四に古例に倣ひて、五に善を生ぜんが爲の故に、飜ぜずとある。陀羅尼(dhāraṇī)、薄伽梵(bhagavan)、閻浮樹(jambū)、阿耨菩提(anuttura-samyak-sambodhi)、般若(prajñā, paññā)の如きがその例である。斯樣な理由で漢譯佛典中に澤山の梵語が見出されるのであるが、この漢譯佛典の上に立てる日本佛教、しかもその佛教が學問的にも信仰的にも深く我が國の文學に根差して、やがて一般民衆の教養の上に偉大なる影響を與へてゐるところからして、古くより我が國語の上にも多くの梵語(古代印度語)の現れてくるのは當然のことである。

二　我國に於ける佛典研究

古くは奈良朝時代に於て佛教の本典並に註疏合せて約一萬卷近くのものが、我が國に傳へられてゐたといふことであるが、これ等の佛典はその當時三寶の一として單に禮拜供養されてゐたばかりでなく、寫經所が設けられて盛んに

筆寫され、而して細かに研究されてゐたのであり、平安朝から鎌倉時代にかけては比叡山は佛教教學の中心從つて佛教文化の中心であつたのである。かやうな點から考へても我が國語に梵語の混つてゐることは別に不審はないのであるが、中には外來語とも氣付かぬ程に日本語に深く喰ひ込んでゐて無雜作に使用されてゐる言葉さへあるのに驚くこともある。先年上田恭輔氏より「國語中の梵語の研究」といふ名著を惠まれたことがあるが、これは文學的に歴史的に興味あるもの約三十語を拔萃して、極めて面白く論述されたものである。

三　我國の悉曇に就いて

印度の原語を支那で音譯する場合には、その當時は原音に最も近い音を有つ漢字を以て充てたものに相違ないが、その當時と雖もピツタリと音が合はないけれども止むを得ず充てゝ置いたといふものもあつたらうし、一方漢字の音そのものも時代に從つて變化のあつたことは、烏の字が古くは「ア」に近く、次に「ウ」に近く、最後に「オ」に近いものであつたことが、原語とその音譯語との比較に依つて究められたことでも分るが、それよりも漢字音を著しく變化させたものは我國の悉曇であらう。悉曇は Siddhaṁ の音譯で、「成就」卽ち「完成されたる」の義であつて、梵語の字母に名付けたものであらう。古より悉曇の傳授とか悉曇を接ぐとかいへる悉曇學なるものは、今日の梵語學よりいへば梵語の字母の讀み方書き方綴り方に過ぎないものである。この讀み方に於て支那や朝鮮から傳へられた當時にどれほど正しく發音されたかは余としては知る由もないが、現今吾人の知る範圍内では著しい變化を見るのである。喉音のカ(ka)がキャに、ハ(ha)がカに、顎音のチャ(ca)がサに、脣音のパ(pa)がハとなつて、ハの濁音がバで半濁音

がパであるとさへ考られるに至つた。

四　俗語化した梵語

或る梵語は佛教の術語としては本來の意義を保つてゐてもそれが一般民衆の間に入つて俗語となつては大變意味の違つたものになつたものも澤山ある。例へば余の鄉國越前などでは火葬場のことをサンマイといふが如きは、サンマイは三昧で梵語 samādhi の音譯語で三昧は定の義で禪定三昧とも熟し、佛道修行に於て最も大切なる戒定慧の三學の一で精神を寂定に入らしめる修養法であるが、これがやがて亡者の燒かれて寂滅の境に入る處であるといふことから、火葬場を斯くは稱するに至つたものであらう。帽子を「アミダに被ぶる」といへばアミダは阿彌陀佛の無量壽佛、無量光佛といふことは忘れて所謂アミダに被ぶることになつてしまつた。般若は梵語のプラジュニヤー(prajñā)より、は寧ろ巴利語のパンニャー(paññā)に近いと思はれるが、智慧の義である般若も恐しい般若の面といふ時の般若とは、妙な變り方をしたものである。菩提はボーディ(bodhi)で、覺とも譯されて佛の智慧卽ち覺(サトリ)であるが、「菩提を弔ふ」といふ時の菩提は大分變つてゐるやうである。以下大體五十音順に文學書や俗語に現はれてゐる梵語に就いて吟味して見よう。

五　國語中の梵語

〔注意〕 **梵**とは梵語、**巴**とは巴利語の事。

國文中に現はれてゐる梵語を集めることに就いては文學士高田修君を煩した、厚く同君に謝す。

〔アの部〕

アカ、閼伽、梵 arghya（アルグァヤ）、巴 aggḥiya（アッギヒヤ）、aggha（アッガハ）。

「宵宵ごとの閼伽の水」といひ、閼伽桶といひ閼伽棚といふが、アカを水の意に解し特に佛に奉る水をさしていふやうになつた。又は漁夫などが船底に溜つた海水を見て、「アカが溜つた」とか、「アカを汲み出せ」とかいふやうにまでなり、アカと水とは同一物をさすやうに考へられるに至つたが、水は梵語では普通にウダカ（udaka）といひ、時としてアーパ（āpa）、ヴァール（vār）、パーニーヤ（pānīya）といふけれどもアカの音に近いものは存しない。されば閼伽は元來水の意味でないことは明らかである。然るに梵語のアルグァヤ、巴利のアッギヒヤは花や水を佛に供養することを意味し、巴利語のアッガハはその作法を意味するのであるが、つまり印度では佛や人に何物かを供する時に必ず水を添へることの習慣あるよりいつしかアルグァヤ、アッギヒヤ、アッガハといふことがかやうな時の水を意味することになつたものであらう。かやうに意味の變化して行く例は他の梵語にもあることであるから、夙に印度に於て始つてゐたことであるかも知れない。閼伽は阿伽とも遏迦ともなつてゐるが、古註に「阿伽は此れ水と云ふ」といひ、「閼伽の水とは此れ卽ち香花の水なり」といつてアカは水を意味することになり、さては船底の水をもさすやうになつたものであらう。人に物を贈る時水を添へるの習慣は我が國に來つて水引を添へるに至つたものであらうとの說がある。

アゴン、阿含、梵　巴 āgama（アーガマ）。

古くは佛教の聖典をアーガマといつたものだ。アーガマは阿含・阿笈摩とも音譯されてあつて、傳來の義から更に教といふ意味になつたのであるが、日本佛教では阿含經といへば小乘の經であつて佛法中最も程度の低い教義が說かれてあるものとし、天台宗の五時の立て方からいへば第二時の鹿苑時といふが十二年間つづいてその間に釋尊は小乘の阿含經を說かれたといふことになつてゐる。この阿含經に當たる經典こそはセーロン・シャム・ビルマの佛教徒にとりては唯一無二の根本聖典とはなつてゐる。

アジャセワウ、阿闍世王、**梵** Ajātaśatru（アジャータシャトル）、**巴** Ajātasattu（アジャータサットゥ）。

釋尊時代の印度に於ける大國摩竭陀（Magadhā）の王で、父の頻婆娑羅王（Bimbisāra）を殺害せんとした話は觀無量壽經にも出で、この惡逆なる王も後には佛法の歸依者となり、釋尊はこの王の卽位第八年に涅槃に入られたのだ。經に未生怨王とも譯してゐる。

アジャリ、阿闍梨、**梵** ācārya（アーチャールヤ）、**巴** ācariya（アーチャリヤ）。

弟子を教導する軌範師で、弟子の有罪無罪を監視して呵責するを役目とする和尙と區別されてゐる。眞言宗にては眞言の秘法を傳授する職位の稱號となつた。

アバタ、痘痕、**梵** arbuda（アルブダ）、**巴** abbuda（アッブダ）。

原語には癰、汚點の義もあり、又胎兒の託胎後第一の七日の狀態を羯邏藍（カツラン）（kalala）或はカララといひ、第二の七日のそれを頗部曇（アブドン）（abbuda）といふのである。佛法中に於て邪見を生ずることを「アッブダ」卽ち濁垢を生じたといふ。かくして我が國では佛教學林の秘語として痘痕をアバタと稱するに至つたものであらう。

アビドン、阿毗臺、**梵** abhidharma（アビヒダルマ）、**巴** abhidhamma（アビヒダンマ）。

大法、無比法、對法の譯あり、又新しく阿毘達磨と音譯されて、佛典中經・律・論三藏の論藏（abhidharma-piṭaka）の總名である。

アビヂゴク、阿鼻地獄、**梵** **巴** avīci（アヴィーチ）。

八大地獄の一、無間地獄とも譯され、極惡の人はこの地獄に陷ちて間斷なく大苦を受けるからである。原語 avīci を阿鼻旨とも音譯す。ア（阿）は無の義。ヴィーチ（鼻旨）に間とか暇とかの義がある。阿鼻叫喚の慘狀などといふ。「念佛誹謗の有情（ウジョウ）ハ　阿鼻地獄に墮在シテ　八萬劫中大苦惱　ヒマナクウクトゾトキタマフ」（親鸞）。

アマ、阿摩、**巴** ammā（アンマー）、**梵** ambā（アンバー）。

古註に「阿摩はこれ女母なり」とあるが、母といふ梵語、巴利語は mātā といふのであるが、巴利語で amma といふのは小兒が母を呼ぶ時に amma（アンマ）といふより起れる母の異名である。阿摩・多多は amma（アンマ）tāta（タータ）の音譯語であるが、善見律毘婆沙第六に、「阿摩とは是れ母、多多とは父を言ふなり」とある。親鸞の聖德太子の和讃中に、「救世觀音大菩薩、聖德皇ト示現シテ　多多ノ如ク捨テズシテ　阿摩ノ如ク添ヒタマフ」とあるを味ふべしだ。又娘や婦女を呼ぶ時にアンマともいふのである。我が國では女の出家卽ち比丘尼（巴 bhikkhunī）を、「オ比丘サン」といひ、又「アマサン」といつてゐるが、原語で比丘（巴 bhikkhu）といへば男の出家のことであるが、「オ比丘サン」といへば女の出家になつてしまつた。その「アマサン」といふのは女であるから「阿摩」の轉じたものであらう。海人をアマといひ、余の鄉國越前では老若の區別なく女を「アマ」と呼んでゐる。「女人講」を「アマ（尼）講」と

いふ。而して比丘尼の尼は ni の音譯語に過ぎざるを、尼をアマと讀むに至つたものであらうか。

アミダ、阿彌陀、**梵** **巴** Amita（アミタ）。

原語アミタは無量の義である。我が國では阿彌陀を略して彌陀ともいふ。阿彌陀經に「是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界有り、名づけて極樂と曰ふ、其の土に佛有り阿彌陀と號す。今現在說法したまふ」とある、阿彌陀佛はその光明無量なるが故に無量光佛、その壽命無量なるが故に無量壽佛と稱せられてゐる。我が國にて古來阿彌陀佛の信仰盛んであつたから、從つてこれが畫かれ又は彫られて本尊として安置されたから一般民衆の眼に觸れる機會が多ければ、佛頭の後光に對する配置よりして、「帽子をアミダに被る」といひ、アミダ籤といふはその後光の放射する形に似てゐるより名づけたものであらう。

アソウギコフ、阿僧祇劫、**梵** asaṁkhya-kalpa（アサンクッヤ・カルパ）。**巴** asaṁkheyya-kappa

アサンクッヤ（阿僧祇）は無數の義ある最大數名である。無數劫とも無央數劫とも譯し、極めて長時をいふ。劫のことは劫のところで說明する。

アビバツチ、阿鞞跋致、**梵** avaivartī（アヴイヴルティ）。

不退轉と譯し、成佛の近路より退かざるをいふ。

〔イ・ヰの部〕

インド、印度、（今の India）。

インドといふは印度文明が今のインダス(Indus)河流域に在つた時代に起つた名稱である。インダス河は古くシンドゥー河(Sindhū nadī)といひ、佛典に辛頭河、新頭河とあるはその音譯である。從つてこの流域をシンドゥ(Sindhu)と稱し、佛典に身毒とあるはその音譯である。波斯語としてヒンドゥ(Hindu)となり、佛典に賢豆、嗣度とあるは正しくこの語の音を寫し、更に希臘語としてインドス(Indos)となつたものである。

キダテン、韋駄天、**梵** Skanda(スタンダ)、**巴** Khandha(カハンダ)。

私建陀、違駄、塞建駄等の音譯語があり、佛教天部の一である。思ふに建駄が違駄となり、更に韋駄に轉じたものか。俗說に、佛涅槃の時捷疾鬼が佛牙を盜み去りしを韋駄天追跡して之れを奪ひ取り唐代に至り南山の道宣律師に授けたとあるより、足の捷き天神として考へられ、所謂「韋駄天走り」といふやうな句が生れたものであらう。

キダイケ、韋提希、**梵** Vaidehī(ヴィデーヒー)、**巴** Vedehī(ヴェーデーヒー)。

釋尊時代のマガダ國王頻婆娑羅王の夫人で阿闍世王の母である。

〔ウ の 部〕

ウバソク 優婆塞、**梵** **巴** upāsaka(ウパーサカ)。

近事男、淸信士とも譯され、在家信者なり。佛・法・僧の三寶に歸依して優婆塞となり、後には五戒を受持することになりてやゝ出家に近く今日我が國の佛教に於ける居士といふが如き位置を占めることになり、僧伽卽ち教團に於て一つの役目を持つやうになつたらしい。我が國にては役小角の如き修行者を役の優婆塞と稱してゐる。

ウバイ、優婆夷、梵　巴 upāsikā（ウパーシカー）。

近事女、淸信女とも譯され、男の在家信者に對して女の在家信者をいふ。やはり三歸五戒を受持することになつてゐる。

ウドンゲ、優曇華　梵　巴 udumbara（ウドゥンバラ）

ウドンゲ又はウドンバラ（優曇鉢羅）ともいひ、學名 Ficus Glomerata である。瑞應華、靈瑞華とも譯されてゐる。この樹は芽出でてから三千年目に一度花開くといふより、「盲龜の浮木優曇華の花待ち得たる心地して」などといふ。

ウラボン、盂蘭盆。梵 ullambana（ウッラムバナ）。

原語は倒懸卽ち頭下足上の意であるが、釋尊の高弟目蓮尊者（巴 Moggallāna）が、天眼通を以てその亡き母の地獄に墮在して倒懸の苦惱に沈める有樣を見て、如何にして救ひ出すべきかを佛に問ひ、佛は毎年七月十五日安居（アンゴ）の竟る日に於て三寶に供養すれば七世の父母を救ふを得べしと敎へられたので盂蘭盆が起つたといはれてゐる。

〔エ　の　部〕

エンマ、閻魔、梵　巴 Yama（ヤマ）。

閻魔、琰魔とも寫されて印度にては古き神なるが佛敎では地獄の王となつてしまつた。Yama-rāja「王」（ヤマラージャー）が閻摩羅社と音譯され閻羅王とも呼ばれるやうになつた。

エンブダイ、閻浮提、**巴** Jambu-dīpa（ヂャンブディーパ）、**梵** Jambudvīpa（ジャンブドゥヴィーパ）。

須彌山を中央にして四大洲がある。巴利名で言へば東なるをプッバヴィデーハ、西なるをアパラゴーヤーナ、北なるをウッタラクルといひ、南なるをヂャンブディーパといふ、南閻浮提といふは南にあるからである。今日より見れば今の印度に當るのであるが、古代印度の佛教徒の世界觀からいへばこのヂャンブディーパこそは實の世界であつて他の三大洲の如きは現代人が星の世界を考へてゐるやうなものであつたであらう。されば日本へ佛教が傳つて見れば日本も南閻浮提の一部となる理である。ヂャンブー樹（jambū）の繁茂する洲なればかく名けられたとある。この洲は北方廣くて南に向つて狹くなつてゐる。人の顏もそれを象つてゐるといふ。

エンブダンゴン、閻浮檀金、**梵** jāmbūnada（ヂャーンブナダ）、**巴** jambūnada（ヂャンブナダ）。

黃金の異名であるが、一說に Jambu-nadī（ヂャンブ河）より產出する黃金なればかく名けられたとある。

〔オ の 部〕

オン、唵、**梵** oṃ（オーム）。

眞言陀羅尼中金剛界の陀羅尼は唵にて始まる。曩莫（ナウマク namaḥ ナマハ）と同樣に歸依、敬禮の意を含むものと見るべきだか眞言宗ではこの聖音に種々の意義を附し、且これを唱ふる功德を述べてゐるが、玆には略する。因に、**ソワカ**、蘇婆訶、**梵** svāhā（スヴァーハー）。唵（オン）にて始まる眞言はソワカにて終る。

オシヤウ、和尙、**巴** upajjha（ウパッヂュハ）upajjhāya（ウパッヂュハーヤ）、**梵** upādhyāya（ウパードゥヤーヤ）。

古代印度の佛教教團にては出家得度の儀式に於てウパッヂャハは重要なる役目を勤めることになつてゐる。我國にては弟子より師を呼ぶ尊稱となり、禪宗にてはオシヤウ、天台宗にてはクワシヤウ、眞言宗、律宗にてはワジヤウ（和上）と讀んでゐる。和尚は于闐國の語から來てゐるといつてゐるが、巴利語ウパッヂャハの訛つたものの音譯と見てはいかにや。

オックウ、億劫（オッコウ）の訛。劫（コウ）の項を見よ。

［カ・ガ の 部］

カツマ、羯磨、巴 kamma（カンマ）、**梵** karma（カルマ）

羯磨は曼陀羅の時にはカツマと讀み、行事作法の時にコンマと讀むことになつてゐる。梵巴の原語には行事、作法、所作、業（ごう）の意義がある。

カシユミラ、迦濕彌羅、**梵** Kaśmīra（カシュミーラ）。**巴** Kasmīra（カスミーラ）。

印度の西北境の國土、罽賓ともいふ。

カセウ、迦葉、**梵** Kāśyapa（カーシュヤパ）、**巴** Kassapa（カッサパ）。

迦葉は佛弟子として頭陀第一の大迦葉尊者、過去六佛の一として最後の迦葉佛である。古代婆羅門の間にカーシュヤパの姓がある。迦葉波とも音譯されてゐるが波（パ）が無くとも葉（ヨウ）の字に古くpa（パ）の音ありとは前中華民國公使王榮寶氏から親しく聞いたことがある、いかにや。

カセンエン、迦旃延、梵 Kātyāyana（カートヤーヤナ）、巴 Kaccāyana（カッチャーヤナ）。

佛弟子としては十大弟子と一人、姓の名としてはゴータマ（瞿曇）姓と共に貴き名として知られてゐる。

カリヤウビンガ、迦陵頻伽、梵 巴 kalaviṅka（カラヴィンカ）、巴 karavika（カラヴィーカ）。

この鳥は雪山（ヒマラヤ）中に住み、殼中に在つて能く鳴くといひ、その微妙の美聲は一切の鳥及ぶものなしといはれてゐる。巴利語では kalaviṅka は雀の類であるとし、karavika は郭公鳥の一種であるとして區別してゐるが、梵語の方には兩方の意味があることになつてゐる。巴利佛典の方の三十二相の中に karavika-bhāṇi「カラヴィーカ鳥の鳴くが如き」といふがあつて聲の美しき相が擧げてあり、一方梵語佛典の方には kalaviṅkasvarauta（カラヴィンカ鳥の鳴き聲）としてある。原語の示す鳥はいかやうにもあれ、迦陵頻伽といへば我が國では極樂の鳥であつて美しき聲を出すものとなつてしまつた。

カルラ、迦樓羅、巴 garuḷa（ガルラ）、梵 garuḍa（ガルダ）。

金翅鳥、妙翅鳥とも譯されてゐるが、猛き鷲を理想化したものであらう。これは龍の敵となつて現はれる。胎藏曼荼羅の迦樓羅の圖を見る時に直ちに烏天狗を思ひ浮ばしめる。然し天狗は憂流迦卽ち（梵 巴 ulūka 梟）から來てゐるといはれてゐる。

カリロク、訶梨勒、梵 巴 harītakī（ハリータキー）。

藥樹の一種で、その果實は眼藥となる。

カリタイモ、訶利帝母、梵 Hārītī（ハーリティー）。

鬼子母神のこと、子を喰ふ鬼女の佛に歸依して優婆夷となれりといふ。後に生産育兒の神として祭られるやうになつた。

カラプン、歌羅分、梵　巴 kalā（カラー）。
一身毛の百分の一の量だといひ、又月の圓の十六分の一の量だともいふ。

カニシキヤワウ、迦膩色迦王、梵 Kaniṣka（カニシュカ）。
月氏族から出で印度に於て廣大なる王國を建設し、佛教信者として佛法弘通の爲に大なる功績を遺した。

カビラ、迦比羅、梵 Kapila（カピラ）。
印度六派哲學の一なる數論哲學（僧佉耶哲學）の祖である。

カンチ、捷椎、梵　巴 ghaṇṭā（グハンター）。
鐘、磬、打木などと譯され、金製若くは木製の鳴物をいふ。

ガビラヱ、迦毗羅衛、梵 Kapilavastu（カピラヴストゥ）、巴 Kapilavatthu（カピラヴットゥフ）。
釋迦族の都、釋尊の父頻婆娑羅王の城、今のネパール國中に在つたもの。

カダ、伽陀・梵　巴 gāthā（ガートゥー）。
偈陀とも音譯され、略して偈ともいふ、頌と譯す。經典中の頌文卽ち詩句をいふのである。

カワラ、瓦、迦波羅、梵　巴 kapāla（カパーラ）。
昔は寺を瓦葺といふ。瓦や煉瓦は印度固有のものである。

ガラン、伽藍、僧伽藍摩、梵　巴 saṃghārāma（サングハーラーマ）。

僧伽藍摩の略稱で、僧伽（saṃgha）と藍摩（ārāma）とから成立し、僧園と譯されてゐる。教團の集まる園であるべきが、後には建築をも含めて僧伽藍摩といふやうになつた。印度の祇園精舍の境内には色々の建物があつて古い經典に一々名を擧げてあるが、その中に毘訶羅（vihāra）といふが重なるもので、これを支那では精舍とか寺とか譯した。然し印度でも後には伽藍の中心つまり禮拜堂となつたものは菩提樹と佛殿とで、佛殿卽ち巴 cetiya（支帝耶（チエーティヤ））梵 caitya（チャイトヤ）が寺とも譯されてゐる。日本にては七堂伽藍を建立するなどといふ。

ガランド、伽藍堂

内の空虛なる室をガランドといふが伽藍堂宇の内部の廣く空虛なるところから起つたものであらう。

ガヤ、伽耶、梵　巴 Gayā（ガヤー）。

釋尊の正覺を成就された處、菩提樹あり、今はガヤといふ町から七哩ほど隔たる所、佛陀伽耶 Buddha-gayā）といふ所である。尼連禪阿（巴 Nerañjarā）その近くを流れてゐる。久遠實成阿彌陀佛　五濁ノ凡愚ヲアハレミテ　釋迦牟尼佛トシメシテゾ　伽耶城ニハ應現スル（親鸞）。釋尊の肉身の誕生地は迦毘羅衛城近くの嵐毘尼園（Lumbini-vana）であるけれとも佛陀としての誕生地は伽耶城であるからであらう。

〔キ・ギ　の　部〕

キリク、紇里、紇利倶、梵 hrīḥ（フリーヒ）。

阿彌陀佛又は觀音の種子で、この一字の眞言を持てば一切の災禍を除して命終の後は極樂に生るといふ。

キレンガ、熙連河、梵 Hiraṇyavatī nadī（ヒランヤヴティーナディー）、巴 Hiraṇyavatī nadī（ヒランニャヴティーナディー）。

金河と譯され、釋尊の涅槃に因緣深き河である。

キンナラ、緊那羅、梵 巴 Kiṃnara（キンナラ）。

疑神、人非人の譯あり、原語に「人か」の義あるからである。樂神となつてゐる。

キヤラ、伽羅、梵 巴 kālāguru（カーラーグル）、又は tagara（タガラ）。

黑沈香の譯あるを以て見れば kālāguru なるべく、一說に多伽羅香のことなりとあれば Tagara であつてこれも香木の一種である。

キヤウシヤヤ、憍奢耶、梵 kauśeya（カウシェーヤ）、巴 koseyya（コーセッヤ）。

高世耶ともあつて、絹布のことである。

ギオン、祇園、梵 巴 Jetavana（セータヴナ）。

祇洹と音譯し、勝林と義譯す。祇多太子（Jeta）の領する園であつたのを須達長者（Sudatta）といふが黃金を園地に敷きつめて買ひ取り、これを釋尊に奉納してからは須達長者の異名給孤獨長者の名を取つて祇樹給孤獨園〔梵 Jetavana Anāthapiṇḍadasyārāma（ゼータヴナ・アナターピンダダスヤ・アーラーマ）巴 Jetavana Anāthapiṇḍika ssārāma（セータヴナ・アナータピンディカッサ・アーラーマ）〕となつた。釋尊の四十五ヶ年の說法多くこの地に於て

なされたことになつてゐる。「祇園精舍の鐘の聲」と平家物語の劈頭を飾つてゐ．祇園精舍の名は我が國では人口に膾炙されてゐる。筆者は昭和七年十二月十一日親しくこの靈地に詣でて感慨無量なるものがあつた。

ギシヤクツセン、耆闍崛山、巴 Gijjhakūṭa pabbata（ギッヂュハクータ・パッバタ）、梵 Gṛdhrakūṭa parvata（グリッドゥラクータ・パルヴタ）。

靈鷲山、鷲峰と譯さる。釋尊說法の靈場である。その名の由來に二說ある．一は、山に多くの鷲が棲んでゐるから二は、その形鷲に似てゐるから、といふ。

ギヤ、祇夜、梵、geya（ゲーヤ）、巴 geyya（ゲッヤ）。

九部經の一、十二部經の一で散文と韻文と雜れる佛典といふことになつてゐる。

ギバ、耆婆、梵 巴 Jīvaka（ヂーヴカ）。

釋尊時代の名醫である。耆婆の話は佛典に委しく出てゐる。

ギバギバ、耆婆耆婆、梵 巴 jīvajīvaka（ヂーヴヂーヴカ）又は jīvanjīvaka（ヂーヴンヂーヴカ）。

極樂鳥の一に數へられ、命々鳥、共命鳥の譯あり、jīva jīva（ヂーヴヂーヴ）「活きよ活きよ」と鳴く鳥だといふ。

〔ク・グ の 部〕

クテイ、俱胝、梵 巴 koṭi（コーティ）。

一千萬なり、或は億ともいふ。百千俱胝劫ヲ經テ　百千俱胝ノ舌ヲイダシ　舌ゴト無量ノ聲ヲシテ　彌陀ヲホメン

ニナホツキジ（親鸞）。

クリカラ、倶利迦羅、梵 Kṛkala（クリカーラ）。
不動明王の化身で、龍が劍を纏ふ形を以て岩上に立つ。

クマラジフ、鳩摩羅什、梵 Kumārajīva（クマーラジーヴ）。
龜茲國（Kuteha）の高僧、後秦時代支那に來つて飜譯事業に從事し、支那の譯經史上大なる功績を遺した人である。

クキラ、倶枳羅、梵 巴 kokila（コーキラ）。
好聲鳥とも譯す。郭公の一種なり。

クハンダ、鳩槃陀、梵 kumbhaṇḍa（クブハンダ）。
人の精氣を啖ふ鬼、四天王の一なる南方增長天王の領する鬼なり。

クドン、瞿曇、喬多摩、梵 Gautama（ガウタマ）、巴 Gotama（ゴータマ）。
釋尊生家の姓で、釋尊を瞿曇佛といふ所以である。

クシジヤウ、拘尸城、梵 Kuśinagara（クシナガラ）、巴 Kusinārā（クシナーラー）。
釋尊入滅の地である。

クシヤシユウ、倶舍宗　倶舍は 梵 kośa（コーシャ）。
倶舍論に依つて立てる宗旨といふよりも學派で、奈良朝六宗の一である。

グンダリヤシヤ、軍荼利夜叉、梵 Kuṇḍaliyakṣa（クンダリヤクシヤ）。

五大明王の一、荒ぶる神なれば夜叉(鬼)といふ。南方に配せられてある。

グンヂ、軍持、**梵** 巴 kuṇḍikā(インディカー)。

水瓶のこと。千手觀音の四十手中軍持手に持てるもの。

〔ケ・ゲ の 部〕

ケサ、袈裟、**梵** kāṣāya(カーシャーヤ)、**巴** kāsīya(カーサーヤ)、kāsāva(カーサーヴ)。

これは樺色のことなるが、染色からして出家の衣服を意味することとなつた、印度では三衣卽ち僧伽梨、鬱多羅僧安陀會とて三種の法衣ありて總て巴利語でカーサーヤと稱すべきであるが、我が國では身に着けるものを衣(コロモ)といひ、肩にかけものを袈裟といふやうになつた。七條袈裟、五條袈裟、輪袈裟といふやうなものである。

ケンチヨク、犍陟、Kanthaka(カンタカ)。

悉達太子は出家を決心して馬丁の車匿(Channa)を從へ犍陟に跨つて城を出でたとある。

ケ、偈、カダに同じ。

ゲジユ、偈頌、カダに同じ。

〔コ・ゴ の 部〕

コフバイ 劫貝、**巴** kappāsa(カッパーサ)、**梵** karpāsa(カルパーサ)。

古貝とも音譯さる。綿布なり。

コフ、劫、巴 kappa（カッパ）、**梵** kalpa（カルパ）。

劫波、羯臘波などの音譯あり、遠大の時節をいふ。智度論には、劫の義を說いて四十里の石山を長壽の人あつて百年毎に一度來りて細軟の衣を以て拭ひて之れを盡すも及ばずといひ、又は四十里の大城に芥子を滿たし、長壽の人百年毎に來つて一粒の芥子を取り去りて盡すも一劫に及ばずなどと譬へてあるが、巴利佛典にも同樣の譬喩が示されてある。磐石劫、芥子劫といふがこの事である。「天の羽衣罕に來て撫づとも盡きぬ巖ぞと」とて一劫の長きを示してゐる。富士山の一合目二合目といふは本は一劫、二劫であつたといふ說は正しいやうである。かくて億劫がオツクウとなり、容易ならぬこと暇のかかることの意に轉じてしまつた。

コンカラ 矜羯羅、Kiṅkara（キンカラ）。

この童子は制吒迦童子と共に不動明王の脇士である。

コンビラ 金毗羅、**梵** Kumbira（クンビーラ）、**巴** Kumbila（クンビーラ）。

鬼神の一、威如王ともある、鰐魚を神格化したるものか。俱毘羅の音譯語もあるが Kubera の音譯語としては（クベーラ）は北方の守護神毘沙門（巴 Vessavaṇa）の異名である。

ゴマ、護摩、梵 巴 homa（ホーマ）。

原語ホーマは供養の義で、火の供養を agni-homa（又は aggi-homa）といふのである。それがいつしかホーマといへば火の供養に限られるやうになつたものであらう。護摩に燒くの義ありといひ、俗に護摩を焚くといつてゐる。護

摩を焚くはこれ一切煩惱を燒き盡す爲であるといふ。

〔サ の 部〕

サンマイ、三昧、**梵** **巴** samādhi（サマーディ）。

三摩地とも音譯され、定と譯されてゐる。佛道修行の根本である。何事にか一生懸命になることを「何々三昧になる」「何々三昧に及ぶ」といひ、「座禪三昧」とか「念佛三昧」とかいふやうになり、地方によつては火葬場を三昧といふやうになつた。

サンミヤクサンブツダ 三藐三佛陀、**梵** saṃyak-sambuddha（サムヤックサンブッダ）、**巴** sammā-sambuddha（サンマーサンブツダ）。

正等覺者、等正覺者、正徧知者と譯し、佛の尊號である。

サンミヤクサンボダイ、三藐三菩提、**梵** saṃyak-sambodhi（サムヤックサンボーディヒ）、**巴** sammā-sambodhi（サンマーサンボーディヒ）。

正眞道、正徧知道、等正覺、正等覺と譯し、佛の獲得せし知であり悟である。

〔シ の 部〕

シツヂ、悉地、**梵巴** siddhi（シツディヒ）。

成就と譯し、眞言の妙果を成就することだといふ。

シッタン　悉曇、梵 siddhaṁ シッダン）。

悉談ともある、我が國では古くから悉曇章なるものがあつて、これはいはば梵語の字母の研究で、その書き方、讀み方、綴り方であつて、今日の梵語學からいへば初步的のものである。我が國の五十音圖は全くこの悉曇文字の排列に依つたものであるから、我が國字音の研究者には悉曇の傳授を受ける必要があると信ずる。

シキシヤマナ、式叉摩那、梵 sikṣamāṇā（シクシヤマーナー）、巴 sikkhamānā（シックハマーナー）。學法女、正學女とも譯し、沙彌尼で具足戒を受けて比丘尼たらんとする女の十八歲より滿二十歲に至る二年間六法を學修する者をいふ。六法とは、（一）染心相觸、汚ない心を以て男の身に觸れる。（二）盜人四錢、他人の四錢を盜む（一人前の出家即ち比丘、比丘尼になつて五錢又は五錢以上を盜めば波羅夷罪といつて破門罪を犯すことになるが）、（三）斷畜生命、畜生の命を取る、（四）小妄語、普通の虛言をつく（大妄語とは比丘、比丘尼が未得の修行に就いて他に語ることで、これも破門罪）、（五）非時食、正午過ぎて食事する、（六）飯酒、酒を飲むことである。

シダリン、尸陀林、梵 sītā-vana（シータヴナ）、巴 sīta-vana）（シータヴナ）。

原語シータは寒の義、寒林とも譯さる。死屍を棄てる墓地であつて、これに入れば身毛竪立して冷寒を覺えるからかくいふのである。墓場のことを一名梵 śmaśāna（シュマサーナ）摩睒那）、巴 susāna（スサーナ）ともいふ。

シッタタ、悉達多、梵 Siddhārtha（シッダールタ）、巴 Siddhattha（シッダッタ）。

釋尊の太子たりし時の名である。略して悉達ともいふ。

〔セ・ゼ の 部〕

セツナ、刹那、（梵）kṣana（クシャナ）、巴 khaṇa（クヽナ）。須臾、一彈指頃、一念とも譯し、極めて短時間をいふ。

セツ、刹、梵 kṣetra（クシヽートラ）、巴 khetta（クヽタ）。田、國土の義である、刹土などいふ。

センダラ、旃陀羅、梵 巴 Caṇḍāla（チャンダーラ）。屠殺を業とし四姓中にも入らない極めて卑賤の種族をいふ。

センダン、旃檀、梵 巴 candana（チャンダナ）。香木名である。英語で sandal wood といつてゐるもの。

セツテイリ、刹帝利、梵 Kṣatriya（クシャトリヤ）、巴 Khattiya（クヽティヤ）。印度四姓の一、武門族で、佛典の上では四姓の首位に置く。

ゼン、禪、梵 dhyāna（ドゥヤーナ）、巴 jhāna（ジャーナ）。禪那の略、靜慮と譯され、三昧（Samādhi）と同義である。佛道修行の根本であつて、これに立てるが禪宗である。

〔ソ の 部〕

ソラ、素羅。

ソラ（空）といふ語が梵　巴の sūra（スラ）から來てゐるかどうか。天卽ち神のことを sūra といひ、その歩む道を sūra-patha といつて虛空のことになつてゐる。和訓栞に「天ヲ翻ジテ素羅トイフ」とあり、東雅にもこの事あり、素羅（又は修羅）がソラとなつたものか。

ソトバ、**窣都婆**、**梵** stūpa（ストゥーパ）、**巴** thūpa（トゥーパ）。

窣都婆、塔婆、塔とも譯し、釋尊入滅の時舍利は八分されて八つの舍利塔が印度國中に建立されたとある。而してその形藁を積んだやうであつたとあるが、筆者は今日印度ベナレスのサルナートなる鹿野苑の靈地に嚴存せる塔を見た時、なるほどと頷かれた。印度に現存の佛教關係の塔形に少なくも三つの種數があるやうだ。それが中央亞細亞の諸國から支那、朝鮮を經て日本に來つて色々の塔形が現はれたやうだ。

ソウ、僧。

僧は僧伽（Saṃgha）の略にて衆卽ち團體の義であるが、我が國では出家を僧侶といひ、僧侶を略して僧といへるより、所謂坊さんの意味になつてしまつた。

ソウモン、桑門。

シヤモンを見よ。

〔シャ　の　部〕

シャカ、釋迦、梵 Śākya(シャークヤ)、巴 Sakya(サクヤ)・Sākiya(サーキヤ)、Sakka(サッカ)?

部族名である。この部族から出でた大聖なるが故に釋尊を釋迦牟尼(巴 Sakya-muni) といひ、又 Sakya-putta(釋迦族の子) ともいふ。釋子とでも譯すべきであるが、我が國にて釋とか釋子とかいふ意味はこの釋子卽ち釋迦牟尼佛の弟子卽ち僧侶廣くいへば佛敎信者といふ意味になつて、つまり釋子の子で巴利語で Sakyaputtiya (サクヤプッティヤ) と稱してゐる。或は釋氏といひ、或は釋門といふ。

シャクダイクワンイン、釋提桓因、梵 Sakra devānam Indra (シャクラ・デーヴーナム・インドラ)、巴 Sakka devānam Inda (サッカ・デーヴーナム・インダ)。

帝釋天のこと、忉利天に居を構へて欲界を支配する神として、梵天と相並んで佛典の上では二大神となつて現はれてゐる。我が國では梵天と帝釋とは古くより崇められ梵釋寺といふ寺さへ建立されたことがある。インドラ(因陀羅)は古代印度では空界を支配する神として崇められた。佛敎時代となつては釋尊に歸依して說法を聽く神々の代表的の者となつた。釋はシャクラ、提桓はデーヴナム「神々の」因はインドラに當る、「ヴー」を洹と寫したるを桓と誤りたるものか。

シャバ、娑婆、梵 巴 Sabhā (サブ〻ー)、梵 巴 Saha (サハ)。

沙訶、索訶などの音譯語があり、これを堪忍の義ありといひ、又雜會の義あるといふ。若し雜會の義ありとすれば Sabhā (サブ〻ー) でなければならず。若し堪忍の義ありとせば Saha でなければならぬ。思ふに娑婆の原語は Sabhā であつたかも知れないが、一方に Saha-loka (サハローカ) なる語があつてそれを沙訶世界又は索訶世界とし、之れ

には忍土といふ意義があり、しかも佛教では忍辱即ち堪忍を尊ぶところから Sahā の方も雜會の眞義を棄てて之れに Saha（サハ）即ち堪忍の義を取り入れたものか、或は本來 Saha であつたものを誤つて娑婆と音譯し、娑婆を Sahā として之れに雜會の義を附したものか、判然しない。梵天（Brahmā）は巴利佛典には Sahampati といはれてゐるが、義淨三藏は娑婆世界主と譯してゐる。その梵語原典にどうなつてゐたものか。善見律毘婆沙に娑婆世界の譯語があつたので、之れに相當する巴利佛典を見ると Cakkavāla（チャッカヴァーラ）とあつた。これは鐵圍山とも譯されて一小世界である。これが集つて一萬の世界とも大千世界即ち三千大世界ともなる。

シャヱコク、舍衞國、巴 Sāvatthī（サーヴァッティー）、梵 Śrāvastī（シュラーヴァスティー）。

釋尊時代には摩竭陀國に次ぐ大國であつた憍薩羅（コーサラー）の都で、舍衞城といつた方がよい。祇園精舍はこの近くにある。

シャリホツ、舍利弗、巴 Sāriputta（サーリプツタ）、梵 Śāriputra（シャーリフトラ）。

釋尊の二大弟子の一人である。

シヤリ、舍利、梵 Śarīra（シャリーラ）、巴 sarīra（サリーラ）。

釋尊の身骨をいふのだが、原語には身體の義のみあつて骨の義は無いが、巴利語の大般涅槃經に依ると、佛身を荼毗に附すると sarīrāni（サリーラーニ）のみが殘つたとある。「サリーラーニ」は「サリーラ」の複數形であつて、一つのサリーラを燒やして多くのサリーラが殘つたとは如何なる故か、之れを註釋して澤山の磨かれた眞珠のやうなものが殘つたことだといつてゐる。舍利が何石何斗と量られ、我が國では何百何十粒と量られて粒形をなしてゐるのは

かやうな傳說に據つたものであらう。舍利は馱都（梵　巴 dhātu）とも稱せられるがこれも dhātuyo とその複數形で示されることになつてゐるが單數形の場合もある。シヤリに米粒の義があるといふが誤解である。米を梵で śāli（シャーリ）巴で sāli（サーリ）といつて音が相似てゐるから生じたものであらう。

シヤノク、車匿、梵 Chaṇḍaka（チャンダカ）、巴 Channa（チャンナ）。

釋釋尊の出家出城の時馬丁である。

シヤマタ、奢摩他、梵 śamatha（シャマタ）、巴 samatha（サマタ）。

止と譯す、止觀の觀と共に佛道修行の根本となつてゐる。心を止水の如くならしめて萬象の如實の相を觀んとするものである。

シヤミ、沙彌、梵 śrāmaṇera（シュラマネーラ）、巴 sāmaṇera（サーマネーラ）。

出家して未だ一人前の沙門卽ち比丘とならざる者をいふ。その女の方をシヤミニ（沙彌尼）といふ。

シヤミニ、沙彌尼、梵 śrāmaṇerī（シュラマネーリー）、巴 sāmaṇerī（サーマネーリー）。

シヤミを見よ。

シヤモン、沙門、梵 śramaṇa（シュラマナ）、巴 samaṇa（サマナ）。

桑門の音譯語もある。出家のこと。室羅磨拏は梵語の音譯で、沙門、桑門は巴利語の音譯であらう。佛蘭西のシルヴン・レヴィ教授は沙門は龜茲國語 samane（シャマネー）音譯語なりと說く、そはサを沙で寫すことは無いからだといふ。

シャラサウジユ、娑羅雙樹。

娑羅樹は梵 śāla（シャーラ）、（巴）sāla で、學名は Shorea Robusta といふ。釋尊は熙連河畔の末羅族（Mallā）の所有にかかる娑羅の樹林中娑羅の二樹相並ぶ所に上衣を敷かしめて頭北右脇の姿勢で涅槃に入られたとある。何故に二樹相並ぶ所に涅槃の床を選ばれたか。古註に二樹相並ぶ所には樹根相もつれて網狀をなしてゐるからであるといふ。

シヤナ、遮那、ビルシヤナを見よ。

シヤナケウシユ、遮那教主、ビルシヤナを見よ。

〔シュ　の　部〕

シユウラ、周羅、梵 cūḍā（チューダー）、巴 cūlā（チューラー）。

前髪であつて出家の時これを剃る。古文書に周羅を同羅としたるあり、誤寫であらう。かくて髪を剃るのスル（ソル）を周羅から來てゐるといふ說さへある。

シユトダナ、首圖馱那、梵 Śuddhodana（シュッドーダナ）、巴 Suddhodana（スッドーダナ）。

淨飯王と譯さる。釋尊の父の名である。

シユタラ、修多羅、梵 sūtra（スートラ）、巴 sutta（スッタ）。

經と譯し、佛典の三藏中に修多羅藏卽ち經藏がある。經は「如是我聞、一時佛」を以て始まつてゐることになつて

ゐる。原語に綎の義あれば七條袈裟を着ける時にその上にかける細長きものを修多羅といふ。

シユリハンドラ、周梨槃特、梵 Suddhipanthaka(シュツディパンタカ)、巴 Cūlapanthaka(チューラパンタカ)。生來愚昧の男であつたが一生懸命修行に勵んだ甲斐あつて佛弟子中有名な者となつた。阿彌陀經では舍利弗を初として七人目に擧げられてゐる。

シユミセン、須彌山、梵 巴 Sumeru(スメール)。迷盧とも音譯され、妙高山ともある。世界の一單位たる所謂一小世界(Cakkavāla)は各々その中央にスメール山あり、その四方に四大洲があり、南方のが閻浮提である。エンブタイを見よ。須彌山は水に入ること八萬由旬、水を出ること亦八萬由旬、その頂上は帝釋天の居所でその半腹に四天王の居所がある。寺の本尊を安置する臺座を須彌壇といふが、須彌山に象つてゐるからである。

シユダツチヤウジヤ、須達長者、梵 巴 Sudatta(スダッタ)。善施とも譯す、善く孤獨者に施すよりして給孤獨長者(梵 Anāthapiṇḍaka アナートパピンディカ、巴 Anāthapiṇḍika アナートパピンディカ)と稱せられた、釋尊に祇園精舍を獻納した人である。

セウダイ、招提、梵 Catur-deśa(チャトゥルデーシャ)、巴 Catuddisa(チャトゥッディサ)。招闍提舍の略稱、四方の義である。佛敎の敎團卽ち僧伽は來る者を拒まざる主義で四方から集り來れば四方僧伽といひ、四方は僧伽の形容詞となつた。奈良には唐招提寺がある。

〔タ・ダ の 部〕

タッシン（又は**ダッシン**）、達嚫、檀嚫、梵 daksina（ダクシナー）、巴 dakkhiṇā ダッキヒナー）
供養、布施、財施のことである。右手の義があるといひて、布施を右手に受けるからといふは當らず。同じ語根から成立した語であるが、右といふ時は形容詞であり、布施の意味の時は女性名詞となつてゐる。

タラジユ、多羅樹、梵 巴 tāla（ターラ）。
扇榎椰で、熱帶地方に多い。かの貝多羅葉の經典といふはこの葉の表裏に經文を刻み入れたるものである。

タイシヤクテン、帝釋天。
シヤクダイクワンインを見よ。

タウ、塔、ソトバを見よ。

ダツマ 達磨、梵 dharma（ドゥルマ）。巴 dhamma（ドゥンマ）。
佛教の眞理、法と譯してゐる。

ダト、馱都、梵 巴 dhātu（ドゥートゥ）。
舍利（シヤリ）と同じい意味に用ひられ、「馱都分散記」などいふ佛舍利を神社などに分配した記錄がある。

ダルマ、達磨、梵 Bodhidharma（ボーディドゥルマ）。
菩提達磨の略稱、梁武帝の時海路を經て印度から支那の廣州に來り、武帝と問答したといふ、達磨大師のことであ

る。

タラニ　陀羅尼、梵 dhāraṇī（ドハーラニー）。

總持とか持とか譯し、しつかり把持してゐる義であるが、執持して忘れぬことをいふ。口で誦する眞言も陀羅尼である。

ダラニスケ　陀羅尼助。

眞言陀羅尼を誦する時口に含みて眠りを防く藥の名で、ダラスケともいふ。

ダンナ、檀那、旦那、梵 巴 dāna（ダーナ）。

布施と譯し、人に物施し時には身命を捨てるところの行爲をいふので、菩薩の大行たる六波羅蜜の第一に位するものである。かやうな行を爲す人を dāna-pati（ダーナパティ陀那鉢底）といひ施主又は檀越と譯してゐるものである。世間でダンナとかダンナサマとかいふはこのダーナパティの意味であるべきだ。かくて自家のお寺を檀那寺といふは寺へ物を布施するからであり、寺からいへばそれは檀家、檀徒、檀中である。

ダンドクセン、檀特山、梵 Dantaloka（ダンタローカ）。

釋尊が前生に松て布施太子たりし時菩薩の行を修した處。西域記に依るとこの山北印度健駄羅國（Gandhāra）に在るといふ。

ダンハラミツ、檀波羅蜜、梵 巴 dāna-pāramitā（ダーナ・パーラミター）。

布施波羅蜜ともいふ。ダーナとハラミツとを見よ。

ダキニラン、荼枳尼天、梵 Dākinī（ダーキニー）。
人の心臓を取つて喰ふ鬼だといふ。

ダイバ、提婆。
一、釋尊に背ける提婆達多（梵　巴 Devadatta）の略稱として。
二、龍樹の弟子提婆（Ārya Deva 聖天）として。

ダイハンニヤテンドク、大般若轉讀。
唐の玄奘三藏譯の六百卷ある大般若波羅蜜多經（Mahāprajñāpāramitā-sūtra）略して大般若經といふを、題目と品名とを讀みその間經卷を繰り擴げて讀誦に擬することをいふ。

ダビ、荼毗。
これに闍維、闍鼻多の音譯があつて焚燒の義なりといひ、正しくは闍鼻多であるといふより見れば、巴 jhāpita（燒かれたる）の音譯語であらうか。巴利語で燒くといふ動詞は三人稱單數現在形で jhāpeti（ヂャーペーティ）となり、燃やさるといふは dayhati（ダイハティ）といふ。

ダンマツマ、斷末魔、梵 marma-cchedin（マルマ・チェーディン）。
末魔（マルマ）を斷つ（チェーディン）といふこと。末魔は人の身體の特異の支節に名け、他物の之れに觸るれば劇痛を生じて死す。かくて人の臨終を意味することになつた。

〔ツ・ヅ の 部〕

ツヅミ、鼓。

ツヅミは都曇鼓といふことから起つてゐるといふ古來の解釋からして都曇といふは梵巴の dundubhi（ドゥンドゥビ）であらうといふ。（高楠先生の說）。

ヅダ、頭陀、梵 巴 dhut（ドゥタ）又は dhūta（ドゥータ）。

抖擻（トソウ）とも譯され、振り落すの義である。古註に煩惱の心の垢を抖擻することだいつてゐる。頭陀の修行は別れて十二又は十三となつてゐるが、要するに衣食住に關して修行者の少欲知足の心得を敎へたものである。

ヅダブクロ、頭陀袋。

頭陀僧の頸に懸ける袋、又は死人を葬る時その頸に懸ける袋をもいふ。

〔ト・ド の 部〕

トリヰ、鳥居、梵 巴 Torana（トーラナ）。

印度サンチー（Sanchi）塔の四方の門をトーラナ（Toraṇa）と稱し、その形が我が國の鳥居に似てゐるより、高楠先生はトリヰの語源をトーラナに求め、鴨居、敷居といふより類推して鳥居となしたものであらうといふ說を立てられた。

トツツテン、兜率天、梵 Tusita（トゥシタ）、巴 Tusita（トゥシタ）。
知足天とも譯され、その内院は彌勒菩薩の淨土、外院は天衆の欲樂處となつてゐる。

トラメン、兜羅綿、梵 巴 tūla（トゥーラ）。
原語トゥーラは綿のことである。

ドウラ、同羅、シュウラ（周羅）を見よ。

〔ナ の 部〕

ナユタ、那由多、梵 nayuta（ナユタ）又は niyuta（ニユタ）、巴 nahuta（ナフタ）。
ニユタを或時は兆と譯す。巴利語のナユタは一の下に零二十八個を從へる大數である。

ナラク、奈落、梵 巴 naraka（ナラカ）。
地獄の異名である。奈落の底などいふ。

ナムアミダブツ、南無「无」阿彌陀佛、梵 巴 Namo-amita-buddha（ナモーアミタブッダ）。文法的に且つ事實上からいへば、一は、Namo mitābhāya buddhāya（ナモーミタブハーヤブッダハーヤ）で「歸命無量光佛」の義、二は、namo mitāyuṣe buddhāya（ナモーミターユシーブッダハーヤ）で「歸命無量壽佛」の義である。光明無量壽命無量の阿彌陀佛を敬禮し、之れに歸依するといふこと。眞宗などではこの南無（ナモー）卽ち歸命を信仰的に深く意義づけることは茲には述べない。ナマンダ、ナンマンダ、ナマダなどと訛つて稱へることがある。

ナムサン、ナムサンバウを見よ。

ナムサンボウ、南無三寶、梵、namaḥ〔namo〕ratna-trayāya（ナマハ〔ナモー〕・ラトナ・トラヤーヤ）南無（ナモー）は敬禮、歸命の義で、三寶は佛と法と僧即ち教團との三寶に歸依することであるが、何か失敗した時の間投詞（感動詞）ともなり、略してナムサン（南無三）とも發する。「お助け下さい」といふことであらう。

ナムカラタンナウトラヤヤ、南無喝囉怛那哆羅夜夜、梵 namaḥ ratna-trayāya（ナマハラトナトラヤーヤ）。ナムカ（ナマハ南無喝）ラタンナ（ラトナ寶）トラヤヤ（トラヤーヤ三）は南無三寶の義である。ナムサンバウを見よ。

ナウマクラタンナウトラヤヤ、那謨囉怛那怛囉夜野。南無三寶を見よ。

〔ニ の 部〕

ニシーダナ、尼師壇、梵 niṣīdana（ニシーダナ）、巴 nisīdana（ニシーダナ）。座具である。

ニレンゼンガ、尼連禪河、梵 Nairañjarānadī（ナイランヂャラー・ナディー）、巴 Neraṇjarā nadī（ネーランヂャラー・ナディー）。釋尊の成道せし佛陀伽耶の近くを流れる河である。

ネハン、涅槃、梵 nirvāṇa（ニルヴーナ）、巴 nibbāna（ニッバーナ）。

釋尊は三十五で佛陀伽耶なる菩提樹の下で佛陀の資格を獲得されたといふことだが、換言すれば三菩提（sambodhi）を成就されたと同時に涅槃の境地に入られたことである。涅槃は佛教の最終の理想であるからである。然るに後世になると、三菩提（正覺）を成就したことを abhisambodhi 即ち成道といつて、成道は三十五のことをいひ、涅槃といへば八十歳娑羅雙樹の間に入寂されたことを意味するやうになつてしまつた。佛の涅槃像といふ時の如き。かゝる佛の涅槃を特にハツネハン（般涅槃 parinibbāna）又はダイハツネハン（大般涅槃 mahāparinibbāna）といふのである。

「ハ・バ の 部」

ハジユン、波旬、梵 Pāpmān（パープマン）、又 Pāpīya（パーピーヤ）、巴 Pāpima（パーピマー）。

波卑夜ともあり、惡魔（māra）の名である。釋尊の目的成就を妨げんとて現はれものはこの惡魔である。波旬は波旬であつて旬はピに近い音であつたであらうとも言はれてゐる。パーピマーは古註に、「惡（パーパ）を持つの義であるいふ。惡魔（māra）は魔羅と音譯されてゐるが、惡魔といふ譯語は「パーピマー」の語をパーパとマーとに別け、パーパを惡としマーはこれを魔と音譯して成立した譯語であらうと思ふ。「いかなる天魔波旬なりとも」。

ハンニヤ、般若、巴 paññā（パンニャー）、梵 prajñā（プラジュニャー）。

智慧と譯す、般若經とか大般若經といふは智慧を重んじ、智慧によつて佛に成らうといふ般若波羅蜜を主にして說いてあるものであるが、我が國でも昔から「大般若經を轉讀す」などいつて大部のお經なれば處處を摘んで讀むこと

であるが古文書を讀むと頻りに出てくることを以て見ても、よく讀まれたものである。「般若の面」といふと何故あのやうな恐しい面になつたか。上田恭輔氏は、「國語中の梵語の研究」の中に、讀經の聲を般若聲と呼び、その般若聲を聞いて怨靈の惡鬼も心を和げるといふことからいつしか般若聲と惡鬼とが混同して惡鬼と般若とを考へ違へした結果であらうといふやうことを述べてゐられるが、そんなことであらう。

ハラダイモクシャ、波羅提木叉、梵 Pratimokṣa（プラティモクシャ）、巴 Pātimokkha（パーティモックハ）。

佛教戒律の根本で、比丘・比丘尼の戒律の個條書といつたやうなものである。解脫戒本とか單に戒本といふがこれである。略して木叉ともいふ。

ハライ、波羅夷、梵 巴 pārājika（パーラージカ）。

佛教教團に於ける極重罪であつて、この罪を犯せば破門されて、再び出家の生活に入るを許されないことになつてゐる、故に斷頭罪ともいはれてゐる。男の出家卽ち比丘には四波羅夷がある。一に、婦人と通ずること、二に、他人の物を取ること、三に、人命を斷つこと、四に、自己の事實持つてゐない資格を持つてゐるが如く吹聽すること、である。

ハラミツ、波羅蜜、梵 巴 pāramitā（パーラミター）。

到彼岸とか又は度と譯されてゐる。これは菩薩の大行であつて、十波羅蜜とも六波羅蜜ともなつてゐる。この大行を修するによつて佛と成るのである。六波羅蜜とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧等である。

ハラナ、波羅奈、梵 巴 Bārāṇasī（バーラーナシー）。

印度の今のベナレス（Benares）のことで、この近くの現今のサルナート（Sarnath）こそは釋尊の初めて五群の比丘に說法せし鹿野苑（又は鹿苑）の聖蹟である。

ハラサイ、波羅奈、梵 pāṣaka（プラーサカ）、巴 pāsaka（パーサカ）。

博奕の骰子。博奕の博、賽の語は共にパーサカから出たものか。（高楠先生說）。

ハリ、玻璃、頗梨、巴 phaṭika（プパティカ）、梵 sphaṭika（スプパティカ）。

水晶のことからしてビードロ即ちガラスを意味するやうになつた。七寶、十寶の一に數へられる。

ハタ、機、鉢吒、梵 巴 paṭṭa（パッタ）。

布帛を織る器械のことなるが、梵語雜名に「鉢吒は絹の梵名なり」とあるやうにパタ又はパッタから來てゐるものであらう。かくて絹を織る機械を「ハタ」といひ、之れを織る人を「ハタオリ」（服部）といひ、之れを我國に輸入し來れる歸化人をハタ（秦）といふ。思ふに原語に絹布の義あるよりかく轉じたものであらう。

ハチ、鉢 梵 pātra（パートラ）、巴 patta（パッタ）。

出家の鐵鉢などといふが、鉢は梵の pātra（パートラ）の音譯語鉢多羅の略稱で容器特に食器をいふのである。

ハツネハン、般涅槃、巴 parinibbāna（パリニッバーナ）、梵 parinirvāṇa（パリニルウパーナ）。

圓寂と譯されてゐる。普通に涅槃といへば釋尊の八十歳の入滅を意味するものなるが、然し涅槃は佛敎の最高理想の境界であつて釋尊は三十五歳に成道されたといふは換言すれば涅槃に到達されたことにもなるのである。然るに後世涅槃に有餘涅槃卽ち今少し煩惱の斷ぜざるものがある、かかる不完全なる涅槃に對して無餘涅槃を說くに至つて、

釋尊八十歳の入滅を般涅槃又は大般涅槃と稱し、羅漢などの入滅をも般涅槃と稱するに至つた。パリ(般)は「完全」の義を持つ接頭語である。

バツトウ 拔頭、梵 pedu (ペードゥ)。

宮中舞樂の一に拔頭還城樂といふがあり、これは奈良朝に林邑の佛徹といふが印度の婆羅門菩提僊那と共に傳へた る臨邑八樂の一である。印度の神話に、アシュヴィン天がペードゥ王にアヒハン(ahihan 殺蛇)又はパイドヴァ(Paidva) といふ馬を與へたりといふを舞曲に作りたるものである。(高楠先生說)。

バルナ、婆樓那、梵 Varuṇa (ヴルナ)。

古く吠陀時代では最高神たることもあつたが後に水神となり、我が國では水天宮となつた。

バラモン、婆羅門、梵 巴 Brāhmaṇa (ブラーフマナ)。

印度四姓中の第一位にあるも佛教では刹帝利を第一位として婆羅門を第二位に置く。智者學者僧侶の階級ともいふべきか。奈良朝時代に來朝せし波(婆)羅門僧正の菩提僊那といふ時の波(婆)羅門僧正は菩提僊那の名よりして婆羅門出身の佛教の比丘とも考へられ又は事實婆羅門の出家沙門なりしを印度よりのものなれば皆佛教關係のものと考へたものか。

バンテイ、畔睇、梵 巴 vande (ヴァンデイ)。

文法上からいへば一人稱單數の形で「我れ敬禮す」の義である。和南(ワナン)を參照せよ。

バイエフ、貝葉、貝多羅葉を見よ。

バイタラエフ、貝多羅葉、梵 pattra（パットラ）、巴 patta（パッタ）。

古くは多羅（tala）とて扇棕櫚の葉卽ちパットラ（pattra）に經文を鏤もて刻み入れたるもの。されば貝多羅葉とはターラパットラ（tāla-pattra）といふべきを單にパットラ（貝多羅）と音譯し更にその譯語たる葉を附したるものである。略して貝葉といひ、佛典の書肆を貝葉書院などいふ。

バカ、馬鹿。

バカは梵語 moha（モーハ）の音譯語である莫何をバカと音讀したる由來すとの說を取る。莫何は愚痴といひ、三毒の煩惱卽ち貪欲、瞋恚、愚痴の一であつて、今も僧侶の常に口にする言葉であるが、古、佛敎學の盛んであつた頃に愚痴の原語を隱語として用ひたものと信ずる。摩訶羅（mahallaka 老人）又はバーラカ（bālaka 小兒、小人）の轉化などいふは當らないと思ふ。

バガバ、婆伽婆、巴 Bhagavā（ブハガヴアー）、梵 Bhagavān（ブハガヴアーン）。

佛の十號の一、尊重すべき、恭敬すべきの義で世尊とも譯してゐる。

パーリゴ、巴利語、巴 Pali-bhāsā（パーリブハーサー）。

パーリを巴利と寫したるは高楠先生の創意にかゝる。サンスクリット卽ち梵語の雅語なるに對しこれは俗語の一種である。南方佛敎徒の信仰に依れば釋尊の說法語なりとして神聖視し、シャム、セーロン、ビルマの佛敎徒の一切經並にその註釋はこの巴利語にて傳へられてゐる。

〔ヒ・ビの部〕

ヒチリキ、篳篥。

梵語の Vallaki（ヴァッラキー）から來てゐるとの說がある。

ビシュカツマ、毗首羯磨、梵 Viśvakarman（ヴィシュヴァカルマン）、巴 Vissakamma（ヴィッサカンマ）。

古く吠陀時代では天地の創造神なりしが後に工巧神となり、佛教では建築の神として知られてゐる。

ビシャモン、毗沙門、梵 Vaiśravaṇa（ヴァイシュラヴァナ）、巴 Vessavaṇa（ヴェッサヴァナ）。

四天王の一、多聞天と譯され、本名はクヴェーラ（Kubera 倶乞羅）で、財寶の神である。佛典では榮華の生活を譬へる時に毗沙門天の如しなどいふ。

ビシャ、毘舍、吠舍、梵 Vaiśya（ヴァイシュヤ）、巴 Vessa（ヴェッサ）。

印度四姓の一、第三位にありて商工業に從事する階級である。

ビルシャナ、毘盧遮那、梵 Vairocana（ヴァイローチャナ）。

遍照の義で、大日如來の原名である。

ビンヅル、賓頭盧、梵 Pindola（ピンドーラ）。

佛弟子の一、所謂十六羅漢の一人である。

ビナヤ、毘奈耶、毘尼、梵 巴 Vinaya（ヴィナヤ）。

律、又は調伏と譯さる。身口意の三業中特に身口の二業の調伏するの義なりといふ。佛典を法と律とに分ち、更に經、律、論の三藏に分つてゐるが、これは出家の日常生活の規定であるといつてよい。

ビンバサラワウ　頻婆娑羅王、梵　巴 Bimbisāra（ビンビサーラ）。

釋尊時代の大國摩竭陀（Magadha）の王で釋尊に歸依す。その王子阿闍世と提婆との話は有名である。

ビク、比丘、巴 bhikkhu（ビヒックゥ）。

男の一人前の出家を比丘といひ、女の方を比丘尼といふ。我が國ではお比丘さんといへば女の方をのみ意味するやうになつた。

ビクニ、比丘尼、巴 bhikkhunī（ビヒックニー）。

「ビク」を見よ。

ビッシュ、苾芻、梵 bhikṣu（ビヒックシュ）。

比丘と同義であるが、これは梵語の音をうつしたもの。

ビードロ、毗琉璃、吠琉璃、梵 vaiḍūrya（ヴァイドゥールヤ）、巴 veḷuriya（ヴェールリヤ）。

原語は七寶の一、もと青玉のことなるが、轉じて水晶、ガラスを意味するやうになつた。「ハリ」を見よ。（高楠先生說參照）。

ビヤクシブツ　辟支佛、巴 Paccekabuddha（パッチェーカブッダ）、梵 Pratyeka-buddha（プラァトエーカブッダ）。

獨覺、緣覺と譯さる。他の爲に法を說かず、獨り解脫を樂しむ。されば大乘佛敎よりいへば佛、菩薩、緣覺卽ち辟

支佛と次第せしむるが、小乘佛教では佛の次に辟支佛を置く。

〔フ・プ の 部〕

フト、浮圖、浮屠、**梵 巴** Buddha（ブッドゝ）。

佛陀と同じい音譯語なるが後世佛教徒卽ち僧侶の義に用ひられるやうになつた。

フサツ、布薩、**巴** uposatha（ウポーサタゝ）、**梵** upavasatha（ウパヴァサタゝ）、pogadha（ポーシャダゝ）。

半月半月の十五日に波羅提木叉卽ち戒本といふを衆僧の前にて讀誦する式である、說戒ともいふ。

ブツダ、佛陀、**梵 巴** Buddha（ブッダゝ）。

浮屠、浮圖、部陀、佛馱とうつし、知者又は覺者と譯す。現今南方佛教徒の間では單にブッダゝといへば歷史上の佛卽ち釋尊を意味し歐米の佛教學者の著書に單に Buddha（ブッダゝ）とあればこれも亦釋尊を意味することに注意すべきである。我が國では單にホトケといへばどの佛樣かといふ不審を起すであらう。

ブンエイ、分衞、**梵 巴** piṇḍapāta（ピンダパータ）。

托鉢に於て施される鉢中の食物をいふのである。

プラクリット、梵 prākṛta（プラークリタ）又は prākrit（プラークリット）

これはサンスクリットの雅語なるに對し自然語卽ち俗語を意味するもので、前述のパーリ語もプラクリットの一種と見るべきである。

〔ベ の 部〕

ベーダ、吠陀、韋陀、梵 巴 Veda（ヴェーダ）。
印度の古聖典。四種あり、Ṛg（梨俱）、Sama（沙磨）、Yajur（夜珠）、Atharva（阿闍婆）である。

〔ホ・ボ の 部〕

ホトケ、佛。
浮屠（フト）家の轉用で、初め僧家を指したるが遂に佛陀の略、佛をホトケと讀むに至れるものか。浮屠を見よ。

ボサツ、菩薩、梵 Bodhisattva（ボーディサットヴァ）、巴 Bodhisatta（ボーディサッタ）。
この原語を菩提薩埵とうつしてあるものの略稱である。佛・菩薩とて佛の次に位するもので將來必ず佛に成るべき資格を持ち、六波羅蜜の大行を修して上は菩提を求め下は衆生を化するといふ。これは大乘の菩薩であるが、原始的には菩薩は波羅蜜を修して菩提を欣求するものをいひ。釋尊に就いていへば、久遠劫の昔錠光佛が出世し其の時釋尊はスメーダといふ婆羅門として生れこの佛の前に於て當來必ず佛と成るべきを誓ひて波羅蜜を修して遂に迦毘羅衛城に淨飯太子と生れ二十九出家して勤苦すること六年、三十五歳で三藐三菩提を成じて佛と成られた、その久遠の間の釋尊を菩薩の稱號を以て呼ぶのである。南方佛教では佛・緣覺・聲聞・菩薩・婆羅門・轉輪聖王・大菩薩と次第してゐるものさへある。

ボンセツ、梵刹、**梵** Brahma-kṣetra（ブラフマクセートラ）。
神聖なる田地又は境界の義からして寺院を意味することになつた。

ボンテン、梵天、**梵** 巴 Brahmā（ブラフマー）。
梵天は世界の主、帝釋は空界の主、佛典には梵天と帝釋とは並び稱せられてゐるよりして古へ我が國には梵釋寺といふ名の寺さへ建立されたことがあつた。

ボンオン、梵音、**梵** Brahma-ghoṣa（ブラフマゴーシャ）、巴 Brahma-ghosa（ブラフマゴーサ）。
神聖なる音聲の義なるが、佛典では佛の聲を意味する。中性 Brahma（ブラフマ）に神聖の義あるよりして梵行、梵鐘などいふ。

ボンジ、梵字、Brahmī-lipi（ブラフミーリピ）。
梵文、梵語、梵筴などいふ。

ボダイ、菩提、**梵** 巴 bodhi（ボーディヒ）。
覺又は智と譯す、佛の悟りである。「サンボダイ」を參照せよ。

ボンバイ、梵唄、**梵** Brahma-pāṭha（ブラフマパータヘ、梵唄匿）。
佛典を歌のやうに高く唱へることである。聲明といふ。

〔マ の 部〕

マ、魔、梵 巴 Māra（マーラ）。
魔羅の略であるが、原語マーラは障礙とも譯し、人の善事を爲さんとするを礙げるもの。釋尊もこの魔を降伏して佛陀の位に到ることが出來た。この代表的のものを波旬といふ、魔王ともいふべきか。ハジュンを見よ。

マラ、魔羅、梵 巴 Māra（マーラ）。
障礙の義あるよりして佛道修行の障礙たるもの婬欲なれば、男根を意味する隠語とはなつた。

マハジユン、魔波旬。
マと、ハジュンとを見よ。

マリシテン、摩利支天、梵 Marīci（マリーチ）。
陽燄と譯す。日月の陽炎を神格化したるものか。天女の形相をなせるか武士の守護神とはなつた。

マシラ、摩斯羅、巴 makkata（マッカタ）、梵 markata（マルカタ）。
猿をマシラといふこと古く萬葉集に出づ。原語マッカタを摩期羅とうつしたるを期を斯と誤寫したるものであらう。舌音タが羅字を以て寫されることは普通であればマシラのマッカタから來てゐることは疑ひなからう。前田太郎氏著「外來語の研究」（五頁）を參照せよ。

マタ、摩哆、梵 巴 mātā（マーター）。
母の義である。

マトウガ、摩登伽、梵 mātaṅga（マータンガ）。

卑賤の男子、女子の方を摩登祇(マータンギ)とはいふ。

マツラ、末羅、梵 巴 Mallā(マッラー)。

末羅國ともあるが、力士の部族であつて拘尸那羅城(Kusinārā)と波婆城(Pavā)と二つの根據地を有し、釋尊入滅の時荼毗式などに於て盡力せしものは拘尸那城の末羅であつた。

マヤブニン、摩耶夫人、梵 巴 Māyā(マーヤー)。

釋尊の生母で、尊んで摩訶摩耶(Mahā Māyā)とも稱せられ、大幻夫人と譯されてゐる。

マカサツ、摩訶薩(摩訶薩埵の略)、梵 Mahā Sattva(マハーサットヴァ)、巴 Mahā Satta(マハーサッタ)。

大有情、大士と譯され、所謂菩薩の通稱である。

マカツ、摩竭、マカラ(摩伽羅)に同じ。

マカラ、摩伽羅、梵 巴 makara(マカラ)。鯨魚とも譯され、海中に棲む怪魚である。

マカカセフ、摩訶訶葉、梵 Mahā Kaśyapa(マハーカーシュヤパ)、巴 Mahā Kassapa(マハーカッサパ)。

釋尊の一大弟子の一人、大飲光と譯さる。釋尊入滅の時一代の說法を結集するの大任を果した。

マカハンニヤハラミツキヤウ、摩訶般若波羅蜜經、梵 Mahā-prajñāpāramitāsūtra(マハープラジュニャーパーラミタースートラ)。二種あり、二十七卷本を大品般若經といひ、十卷本を小品般若經といふ。羅什三藏の譯である。

マカハジヤハダイ、摩訶波闍波提、梵 Mahā-prajāpatī(マハープラジャーパティー)、釋 Mahā-pajāpatī(マハーパジャーパティー)。

釋尊の姨に當り、生母摩耶夫人産後七日にして死するや、代りて釋尊を養育した養母である。

マカエン、摩訶衍、梵 Mahāyāna（マハーヤーナ）。

大乘と譯す。摩訶は大、衍は乘卽ち敎の義である。菩薩の敎法をいふ。

マカエンナ、摩訶衍那。マカエンに同じ。

マカタゴク、摩伽陀國、梵 巴 Magadhā（マガダ〜）。

釋尊時代の印度の大國、首都を王舍城(Rājagaha, Rājagṛha ラージャガハ)といひ、王舍城の近くに有名なる耆闍崛山がある。

マヒンダ、摩哂陀、巴 Mahinda（マヒンダ）。

阿育大王の王子、出家して師子國今の錫蘭島の傳道に當たる、錫蘭佛敎の開山たり。摩哂陀の錫蘭に渡りしは實に佛の入滅後二百三十六年だと記さる。

〔ユ の 部〕

ユジュン、由旬、梵 巴 yojana（ヨージャナ）。

唐土の里法六町を一里として、一由旬を四十里又は三十里に當るといひ、異說あり。西洋の學者は、約七哩、又は約十二哩に當るといふ說がある。一由旬の四分の一を伽浮陀(gāvuta ガーブタ)といふ。

ユガ、瑜伽、梵 巴 yoga（ヨーガ）。

相應と譯さる。觀念を凝らす修行法に名く。密敎を瑜伽宗と稱し、支那の法相宗を印度にあつては瑜伽宗と名くといふ說がある。

ユキマ、維摩、梵 Vimalakīrti（ヴィマラキールティ）。
無垢稱と譯され、維摩經にて大乘法を說く居士の名である。

〔ラ の 部〕

ラタナ、囉怛那、梵 ratna（ラトナ）、巴 ratana（ラタナ）。
寶と譯す。經に七寶を說き、又十寶を說く。

ラセツ、羅刹、梵 rakṣasa（ラークシャサ）、巴 rakkhasa（ラッカサ）。
惡鬼の總名である。

ランビニ、藍毗尼園、嵐毗尼、梵 巴 Lumbinī（ルンビニー）。
釋尊の誕生した園林の名である。今は Luminidei と稱してゐる。

ラカン、羅漢。
阿羅漢（梵 arhan「アルハン」巴 arahan「アルハン」）の略稱で、應眞とも譯され、十六羅漢などとて佛弟子のことになつてしまつた。

ラゴラ、羅睺羅、梵 巴 Rāhula（ラーフラ）。

釋尊の菩薩たりし時の子、出家して弟子となる。十大弟子の一たり。

〔リ の 部〕

リグベータ、梨倶吠陀、梵 Ṛgveda（リッグヴェーダ）。ベーダを參照せよ。

リヨウガセン、楞伽山、梵 巴 Laṅkā（ランカー）。

今の錫蘭島に在るアダムスピーク（Adams Peak）のこと。筆者は昭和七年十一月十八日この頂上に登つた。

〔ル の 部〕

ルリ、瑠璃、梵 vaiḍūrya（ヴァイドゥールヤ）、巴 veḷuriya（ヴェールリヤ）。

七寶又は十寶の一、青色の寶石、毗瑠璃、吠瑠璃の略稱である。

ルシャナ、流舍那、盧舍那、梵 Vairocana（ヴァイローチャナ）。

ビルシャナと原語は同一であるが、音譯語を異にするところから、ルシャナを報身佛となし、ビルシヤナを法身佛とする。

〔ワ の 部〕

ワナン、和南、梵 巴 vandanā（ヴァンダナー）。

敬禮の義である。

結　語

以上、國語化したる梵語の重なるものを列記したのであるが、人口に膾炙されてゐるもので省かれてゐるものもあらうし、又國語化された梵語としては餘りに佛教專門になり過ぎたと思はれるものもないでもないが、その限界を定めることが困難なところからしてかやうな程度にとどめて置いた。これ等の言葉が最初に我が文獻に現れた典據を知ることは興味あることであらうが、それは余の力及ばぬことで、先覺の示教を仰ぐ次第である。（完）

昭和八年十月七日印刷
昭和八年十月十五日發行

國語科學講座
（第四回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02957 7335

PL
664
S3N32